崎辺中学校進路通信　　第37号

羅針盤

文責:迎　房子　令和3年10月6日(水)

推薦入試受験を検討するにあたって

多くの生徒や保護者の方が気になっている「推薦入試」。進路説明会でもお話しますが、入試制度のひとつとはいえ、安易に選択するのではなく、そのメリット･デメリットを十分理解したうえで、自分に適した入試制度なのか検討することが大切です。公立前期選抜入試も同様にお考えください。

【メリット】

1. 中学校生活(学習への取組、挨拶･服装･清掃をはじめとする生活面、係活動･生徒会活動、部活動等)に意欲的に取り組み、それに応じた評価(実績)があり、さらに**将来の目標をしっかりと持っている生徒にとっては、希望する進路に進学するにあたって活用できる手段**であり、**チャンスを広げるもの**でもある。

2. 私立高校奨学生(特待生)等の資格を取得できれば、家庭への**経済的負担を軽く**することができる。

【デメリット】

推薦入試での受験＝合格ではない。特に、校内推薦委員会を通過したことで受験合格というように錯覚する者がいる。⇒学習に力が入らない。

1. 上記のことにより、推薦受験決定後まで取り組んできた**受験勉強がおろそかになりやすい**。

〔過去のデータでは、推薦入試受験決定となった生徒たちの10月実力成績と1月実力成績を比較すると、他の一般受験者のほとんどが成績を伸ばしているのに対し、推薦入試受験者は、下がった生徒が多い傾向にあった。〕

※一般的に、冬休みから2月中旬(推薦合格内定発表)までのおよそ40日は、一般入試受験者は必死になって勉強している。推薦入試受験者がこの時期に手を抜くと、もし不合格となった場合、立ち直って学習に取り組んでも、そのブランクを埋めることは難しい。(**本当の実力が身に付いていないと、高校入学後に苦労する**。)

2. 校内推薦委員会及び実際の受験で失敗した場合、たとえチャンスがあるとわかっていてもその時の**本人のショックは大きいもの**である。特に、同じ学校を複数の生徒が受験し、自分だけが不合格となった場合のショックはたいへん大きい。**これを乗り越えられる精神力も必要**である。

〔校内推薦委員会から受験までの本人の学習に対しての取組、不合格となって立ち直るまでのブランクが、次の学力検査に及ぼす影響も考慮しなければならない。〕

3. 本来推薦に値する生徒は、生徒の中から**人物的にも選ばれた者である**ので、推薦入試合格内定後も、学校生活において卒業に向け意欲的に生活を送ることを推薦入試の受験決定時に確認している。しかし、過去の状況を見ると、残念ながら学校生活(授業態度や服装等)で気の緩みが見られ、推薦入試を安易に考えている生徒もいた。**推薦入試受験の希望を申し出る段階までに、本人(保護者)にしっかりとした自覚が求められる**。

◎**進路説明会の資料を本日配布**しております。**事前に目を通して当日御持参ください**。